

50年後のカクテル・パーティー

写真は朝日新聞 6 月 10 日朝刊から。「女性の遺体が遺棄されていた現場近くには多くの花が供えられ、訪れた人が手を合わせていた＝9 日午後 2 時 7 分、沖縄県恩納村」とある。

このあと表題の同紙 6 月 12 日の福島申二編集委員の「日曜に想う」が心に響いた。抜粋して紹介したい。

沖縄は梅雨に煙っていた。緑深い恩納村の山あい。



雨にぬれたアスファルト道路の脇に、おびただしい数の花束が供えられていた。「怖かったですでしょう。あなたの死を無駄にはしない」。そんなメッセージも置かれている。米軍族の男が逮捕された殺人事件の死体遺棄現場に立つと、突然人生を絶たれた女性(20)を悼む人、ひいては基地の島の現状を憤る人がいかに多いかに想像がおよぶ。翁長雄志知事も訪れ、ひざをついて手を合わせた。「守ってあげられなくてごめん」と胸の中で語りかけたそうだ。その断腸の思いに、沖縄の人は 21 年前を重ね合わせたに違いない。

「行政を預かる者として、本来一番に守るべき若い少女の尊厳を守ることができなかったことを、心の底からおわびいたします」。1995 年、米兵 3 人による少女暴行事件に怒った県民総決起大会の壇上、当時の大田昌秀知事が絞りだした言葉は人々の胸を突いた。今回の被害者は、ちょうどその頃に生まれた女性だ。「何も変わっていないのです。日本政府には変える気がない。これで主権国家といえますか」。久しぶりにお目にかかると、91 歳になる大田さんの厳しい口調も変わっていなかった。変わりようがないのだ、と思う。

大田さんと同年生まれ、沖縄初の芥川賞作家である大城立裕さんも、「沖縄は本土復帰前と変わらない治外法権的状态ですよ」と嘆きは深い。小説「カクテル・パーティー」で賞を受けて、来年で 50 年になる。日本から切り離されて米軍の統治下におかれた沖縄が、植民地的な抑圧と屈辱感に苦しんでいた時代を描いた作品だ。---- 安倍首相が自賛する固い絆の日米同盟とは、いわば沖縄という島をアメリカへの捧げ物にして華やぐ隷属的なカクテル・パーティーではないのかと。復帰後に沖縄から米国に留学したある大学院生が、ゼミで米兵による性犯罪の多発を訴えた。すると「レイプなんかニューヨークでも毎日起きている」と反論された。「違う」と説明した。「ニューヨークで捕まった犯人は刑罰を受けなくてはなるまい。だが沖縄では基地の中へ逃げ込めばそれで済むのだ」この逸話は、事件のたびに問題になってきた「日米地位協定」の一面を、粗いが象徴的に言い表している。---- 6 月 23 日の慰霊の日が今年も近い。

(2016 年 6 月 16 日)